

## 「タオルびと」2012年11月号（創刊号）

### 目次

1. 「タオルびと～タオルづくりの技と伝統のなかに息づく日本のモノづくりの原点～」創刊に寄せて
2. 戦後の今治タオルの歩み
3. 次号予告

#### 1. 「タオルびと～タオルづくりの技と伝統のなかに息づく日本のモノづくりの原点～」創刊に寄せて


「タオルびと」とは、タオルづくりにたずさわる人びとに対して尊敬の意をこめて名付けた造語である。舞台となるのは、愛媛県北東部に位置する今治地方。瀬戸内の穏やかな海に面し、しまなみ海道をのぞむこの地に、戦前から日本の経済発展の一翼を担ってきた織物業がその歴史を刻んでいる。

今治地方の織物業は、江戸時代からつづく地域産業であり、時代の状況に合わせて小幅綿布（伊予木綿とも呼ばれる）、綿ネル、広幅綿布、そしてタオルへと主力製品を変えながらその伝統をうけ継いできた。戦後は、タオルに特化して生産量を増やしていき、1960年にはタオル生産において先陣を切っていた大阪の泉州タオルを抜いて日本一となった。

戦後、今治のタオル工業が発展していった要因はいくつか考えられるが、そのなかでも産地の企業家や技術者など、人の果たした役割はたいへん大きい。しかしながら、これらの人びとがどのようにしてタオルづくりにたずさわってきたのかを知るうえで重要となる、人物像や思想、技術などを具体的に記した資料や文献は、きわめて少ない。「タオルびと」発刊の目的は、まさに、これらの人びとの記録を文字として残し、情報としてひろく発信することにある。

「タオルびと」では、今治を愛し、タオルを愛し、戦後から現在

において今治タオルの歴史を紡いできた、あるいはいまでも紡ぎつづけている人たちが登場する。戦後から今治タオルが歩んできた道のりにそって各時期のタオルびとに焦点をあて、どのように人から人へバトンが渡されてきたのか、どのように伝統が受け継がれているのかを描いていく。

なるべく多くの方々に「タオルびと」を読んでいただくために、毎月16日に今治市立図書館のホームページをつうじて情報を発信する。「16日」という日は、今治タオルにとって特別な日でもある。今治地方でタオル生産が開始されたのは偶然ではなく先人たちの努力の賜物であるが、なかでも阿部平助は今治タオルの礎をきずいた人物である。この阿部平助の命日が1938年11月16日であったことから、「タオルびと」の創刊号を11月にし、発信日を毎月16日とした。

「タオルびと」発刊にあたっては、四国タオル工業組合をはじめ、愛媛県産業技術研究所繊維産業技術センター、今治市産業部商工労政課、今治商工会議所中小企業振興部、愛媛県繊維染色工業組合、今治市教育委員会社会教育課の方々に多大なご声援とご協力をいただいた。この場をかりて感謝



阿部平助イラスト

の意を表したい。「タオルびと」をとおして、今治のために、そして日本のために、有意味で興味深い情報を発信していければ幸いにおもう。


2012年11月16日


「タオルびと」制作プロジェクト委員会

辻智佐子（城西大学）

## 2. 戦後の今治タオルの歩み

タオルびとの話をはじめめる前に、戦後の今治タオルの歩みを年表と統計を使って時系列にみてみよう(「今治タオル年表」および図1～4)。



戦後から1950年代は、今治タオルの再出発の時期である。今治のタオル工場は、戦争中の空襲によって大部分を焼失し、ほぼゼロからのスタートを切った。企業家たちの努力によって、バスタオルを中心とする先晒きまさらし の広幅タオルを主力製品としておもに輸出に販路をもとめ、戦後復興を果たした。のちに国内で大ヒットとなるタオルケットが市場に登場するのもこの時期である。また、1950年の政府による織機設備制限の撤廃や国内需要の高まりによってタオル生産が急増したため、はやくも1954年にはタオル業界における需給調整が開始された。

1960年代は、今治タオルの成長期にあたる。今治がタオル生産の先進地であった泉州や紀州をぬいて日本一の生産量を記録し、とりわけ1960年から1965年において企業数と織機実台数が急増した。また、自動織機の普及によって製織工程における効率化がすすむ一方で、従業員数はピークを記録した。1950年代に登場したタオルケットが爆発的に売れ、ジャカード機をつかったタオルケットやバスタオルなどの広幅タオルは今治タオルの代名詞となった。産地の人材育成と技術開発に多大な貢献をした染織試験場では、次世代の織機となる革新織機 が開発された。

1970年代は、今治タオルのさらなる飛躍の時期となった。1970年から1975年に企業数と織機実台数がふたたび急増した。企業数は1976年にピークをむかえ、その後徐々に減少に転じる。生産量は、1971年から1973年に激増したが、石油危機の影響でいったん低迷した。一方で、織機の自動化にともない従業員数は徐々に減少していった。タオル市場では、タオルケットの売行きはまだ見通しが明るく広幅タオルを主力に売上を伸ばしていったが、タオル製品の多様化および高級化も進行した。

1980年代は、今治タオルの成熟期といえる。ここにきて好調だったタオルケットの需要が頭打ちとなり、代わってバブル経済を背景に贈答用ブランド名入れタオルが流行し、全体として生産量が伸びた。1985年のプラザ合意による円高は、輸入タオルの増加を招来すると同時に、タオルメーカーをはじめとする他の加工業者の海外進出の契機となった。

1990年代は、今治タオルにとって転換期となる。1991年に生産量のピークをむかえ、バブル経済の崩壊とともにこれ以降減少の一途をたどる。今治の生産量をはじめて全国の輸入量を下回り、企業数と織機実台数とも激減した。このような状況のなかで技術面において、設備織機における革新織機の普及率が約5割にせまり、合理化がさらに促進された。

2000年以降は、今治タオルの変革期、正念場といってもいいだろう。生産量は2004年まで急落したが、それ以後はゆるやかな減少に転じ、ここ数年は増加傾向にある。輸入浸透率は2000年に約6割となり2007年には8割をこえたが(表1)、緊急輸入制限を規定したセーフガードが2004年に見送られたため、産地では新たな自助的対策を強いられることになった。その対策のひとつが、2006年にスタートした「JAPANブランド」育成支援事業の一環である「今治タオルプロジェクト」である。同プロジェクトでは、新しいブランド&ロゴマークの作成、タオルソムリエの資格試験の実施、タオルマイスターの認定など新たな産地発の取り組みがおこなわれた。この成果が近年徐々にあらわれ、1991年以降の生産量の減少に歯止めをかけた。そして現在も、産地での模索と挑戦はつづいている。

以上のように、戦後からおよそ70年、今治タオルは成長と発展、衰退と低迷を経験してきた。タオルづくりにたずさわってきた人びとは、あるときは笑い、あるときは泣き、あるときは悩み、喜怒哀楽を何度もくり返してきた。その結果、タオルづくりをあきらめた人もいる。しかし、タオルとともに人生を歩みつづけている人もい

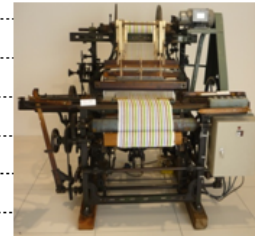
る。戦後から70年をかけぬけた人びと、そしていまもタオルづくりの伝統を守りつづける人びと、そのようなタオルびとの足跡を次号からみていくことにしよう。

今治タオル年表

年次	おもな出来事
1945	空襲でタオル工場のほとんどを焼失しほぼゼロからのスタートを切る
1947	民間貿易許可によりタオル輸出が徐々に回復
1950	糸へん染気と設備制限の撤廃によるタオル織機の増大
1951	繰糸割当と価格統制の廃止、タオルケットの出現
1952	「特定中小企業の安定に関する臨時措置法」（中小企業安定法）施行
1953	タオル創業60周年記念「タオル祭」開催
1954	「タオル製造業生産設備制限規制」および「未登録タオル織機設備制限規制」施行
1955	「タオル生産制限規則」および「繊維製品品質表示法」施行
1956	タオルケット生産でタオル好況、染織試験場によるタオル織機の自動化
1958	「中小企業団体の組織に関する法律」（団体法）施行、タオルケットの需要増加
1959	「最低賃金法」施行
1960	今治タオルがタオル生産日本一となる、織機封印解除、晒染色工場水道建設
1961	2部操業の容認、チーズ晒染色法の導入、「乾縮に関するタオル調整規制」施行
1962	繰糸機の登録制開始、第二水源増設
1963	「中小企業近代化促進法」施行、チーズ晒工程における過酸化水素による装置の導入、硬水軟化装置設置
1964	今治タオル2部操機
1967	「特定繊維工業構造改善臨時措置法」（特備法）施行、パキスタン繰糸輸入開始（越智絹商会など6工場）、採染の乾操工程においてパネルヒーターが実用化
1968	四国タオル工業組合が「タオル館」を設立、愛媛県タオル染色工業組合によるビーム晒染色法（ビームワイジング加工）の開始、採染工程にオートスクリーン導入
1969	岩倉省より「特定業種雇用構造近代化対象集団」の5業種のひとつとしてタオル業種が認定される、タオル専用自動採染機の開発、ルームワインダー付自動織機の採用、染織試験場によるタオル革新織機の開発
1970	タオル業界成長長期に突入（輸出減少、輸入増加、内需停滞、生産過剰など）、四国タオル工業厚生年金基金設立
1971	第1回国家技能検定「タオル織機調整技能士」実施、玉川ダム工業用水供給開始
1972	タオル輸出が輸入を超過（輸入2,383トン、輸出1,362トン）、繰糸業者の増加、タオルケット売行き好調で未登録織機増大
1973	「臨時繊維産業特別対策に係る特別措置実施要領」設置による過剰織機の買上可能、「中小企業団体に係る法律に基づく命令の規定による織機の登録の特例等に関する法律」（織機特例法）施行、「四国タオル技能士研究会」発足
1974	「繊維工業構造改善臨時措置法」（新備法）施行
1975	新製品開発宣伝事業の一環として「アナタのアイデアをタオルに」をキャッチフレーズに全国よりアイデアを募集し今治と大阪で新作展示発表会を開催
1976	企業数が500社を超えピークとなる、東京と松山で日本初のタオル・ファッションショー開催、繰糸機にリング式導入
1977	名古屋と福岡でタオル展示会開催、紙製製作機に電子式縦影機が出現
1978	札幌で展示会とファッションショー開催、1973年の織機特例法に基づく過剰織機の買上廃棄実施（広幅531台＋並幅333台＝864台廃棄）、染織試験場による衣料用タオル地の開発
1979	国定床式排水システム開発、「産地中小企業対策臨時措置法」（産地法）公布施行
1980	タオルケットの不振
1981	2割の自主操機、染織試験場および矢原織機製作所による新型レピア式革新織機の開発
1982	「今織振興ビジョン研究会」発足
1984	タオル織機買上の協同廃棄開始



前橋地区の橋群  
（写真提供：多岐史秋彦）



片2丁繰機  
（テクスポート提供：長沢）

1985	バブル経済突入、プラザ合意による円高が加速、「ドリーマックス」結成、デザイン・意匠・紋紙製作におけるコンピュータの導入
1986	バブル経済による贈答用ブランド名入れタオルの売行き好調、バブル経済による労働者不足が顕在化
1988	大手タオルメーカーの海外進出（楠織紋織機がタイで合併事業を開始したのを皮切りにこれ以降他企業も海外へ）
1989	東洋紡績会社の工場跡地を四国タオル工業組合へ払下げ
1990	株式会社織機リソースセンター設立、タオル専門問屋の内野麻がシンガポールにタオル製造販売事業所を設立
1991	タオル生産量がピークとなる
1992	バブル経済崩壊の影響をうけて生産量が減少に転じる、過産省のファッションタウン調査対象地域に選定
1993	今治地域特定中小企業業績活性化計画の支援事業として愛媛県繊維産業試験場による「デザイン新商品開発事業」の開始（～1997年）、大手の染色加工業者が海外進出（四国工業㈱および大和染工㈱が中国に子会社設立）
1994	円高を背景に輸入タオルが1990年のおよそ2倍の32,000トンを超える
1995	中国でもジャカード機による高級タオルの生産を開始
1996	今治のタオル生産量が全国の輸入量を下回る
1999	革新織機の普及率が約5割となる
2000	輸入浸透率が5割を超え国内生産量を上回る、四国タオル工業組合と日本タオル工業組合連合会が「タオル輸入秩序化に関する要望書」を過産省に提出、「輸入タオル規制総決起大会」開催（2,700人参加）、今治市長が「輸入タオル急増を緩和する輸入秩序化について」の要望書を過産省に提出
2001	セーフガード申請
2002	企業数が200社を下回る
2003	テクスポート今治内に今治タオルショップ（本店）開業
2004	経済産業省がセーフガードを見送る
2006	「JAPANブランド」育成支援事業の一環で「今治タオルプロジェクト」スタート、輸入タオルがおよそ85,000トンに達する
2007	今治タオルの新ブランド&ロゴマーク発表、東京ビックサイトにてインテリアライフスタイルショー開催、第1回タオルソムリエ資格試験を実施、第1回今治タオルメッセ開催、新宿伊勢丹にて今治タオルのコーナー設置
2008	第2・3回タオルソムリエ資格試験実施、第2回今治タオルメッセ開催、初のタオルマイスター誕生（4名）
2009	第4回タオルソムリエ資格試験実施、第3回今治タオルメッセ開催
2010	国内のタオル生産が今治と京州の2地域となる、第5回タオルソムリエ資格試験実施
2011	第6回タオルソムリエ資格試験実施
2012	インテリア雑貨・生活雑貨国際見本市（イタリア・ミラノ）出展、第7回タオルソムリエ資格試験実施、今治タオル直営店「今治タオル南青山店」開業



佐藤可士和氏デザインブランド  
& ロゴマーク  
（テクスポート今治：提供）

参考資料：菅原利雄『今治綿業発達史』今治綿業倶楽部、1951年。今治郷土史編さん委員会編『今治郷土史 今治地誌集』資料編・近現代3（第8巻）、今治市役所、1987年。愛媛県銀行調査部編「全国一のタオル生産量を誇る 今治のタオル製造業について」『ひめぎん情報』126号、株式会社銀行ふるさと本部、1989年、9-10頁。今治郷土史編さん委員会編『今治郷土史 現代の今治』地誌近現代4（第9巻）、今治市役所、1990年。「四国タオル工業組合」提供資料。村上克美「今治タオルの危機の果敢と課題」『松山大学論集』第12巻第5号、松山大学、2000年、33-59頁。

表 1 輸入浸透率

年次	(%)
1997	42.8
1998	44.9
1999	49.9
2000	57.5
2001	62.4
2002	66.7
2003	71.8
2004	74.9
2005	76.6
2006	79.4
2007	80.9
2008	80.7
2009	81.7
2010	81.5
2011	81.2



図1 企業数(社)

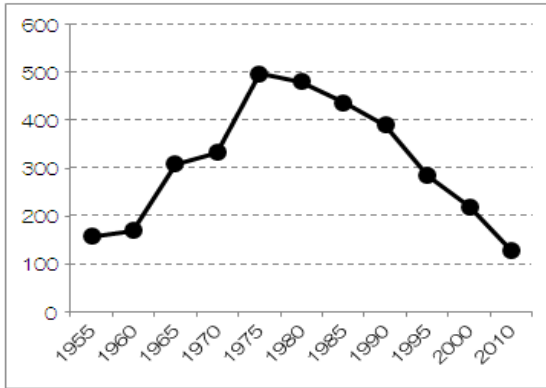


図2 従業員数(人)

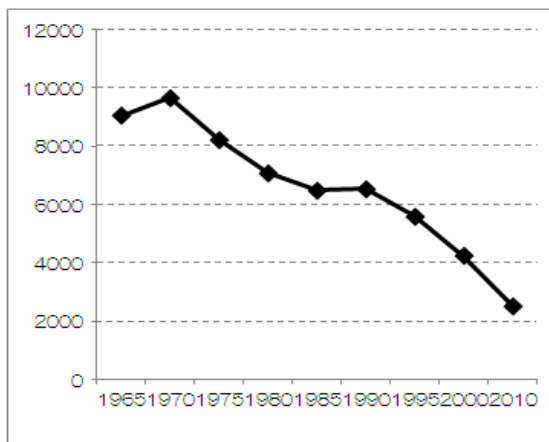


図3 織機実台数(台)

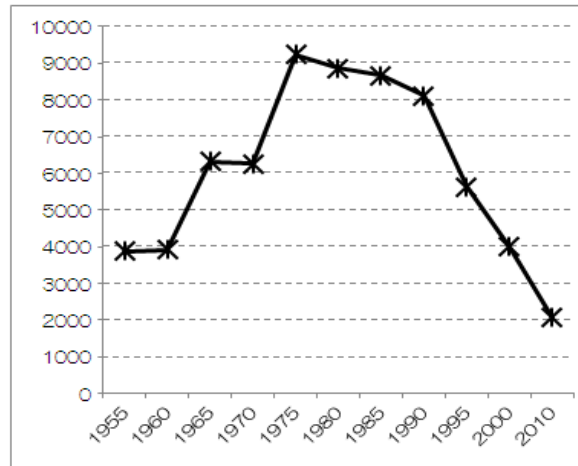
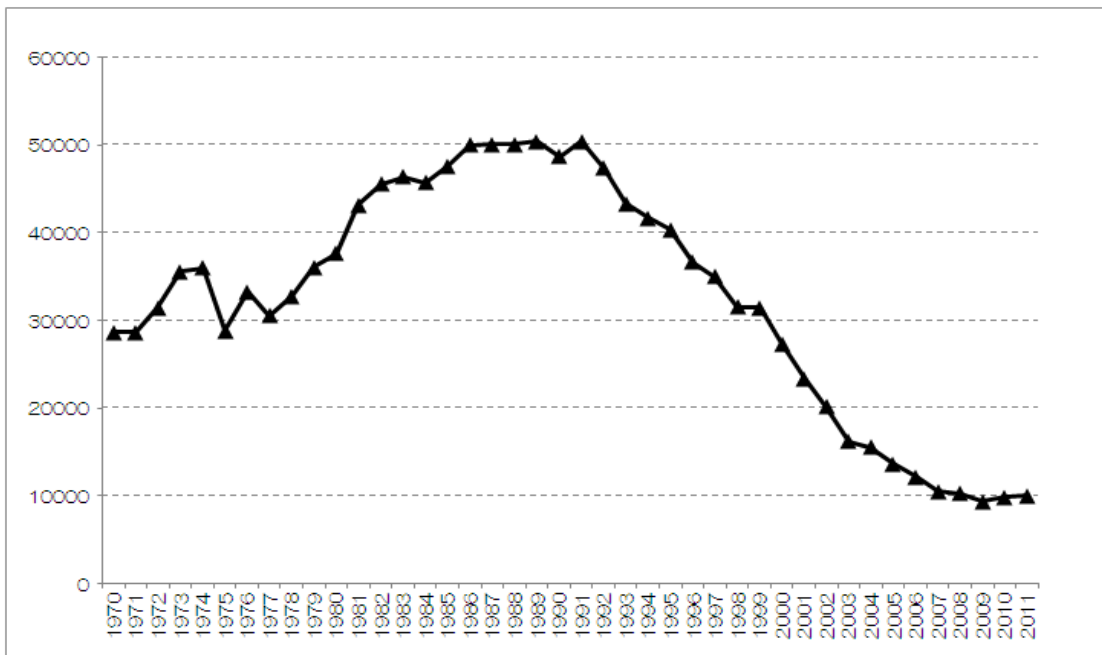


図4 生産量(ト)



いずれも「四国タオル工業組合」提供資料より作成。

## 参考文献

在間愛民『中小企業技術者研修講座テキスト「織物概論」のうち今治綿業の変遷』愛媛県立染織試験場（出版年度は不明）。

「四国タオル工業組合」提供資料。

## タオル小唄

作詞： 時雨音羽      作曲： 吉田正

- |  |  |
|--|--|
| 一、 花のタオルが 世界に好かれ<br>今じゃパリーの 客も来る<br>ヤンレヤレコノ 今治織姫<br>えゝ 娘じゃの      | 三、 昔手拭 今ではタオル<br>みんな見惚れる ほどの良さ<br>ヤンレヤレコノ 織っても織っても<br>織りきれぬ    |
| 二、 可愛いあの娘の 湯あがりタオル<br>みえちゃかくれる さくらんぼ<br>ヤンレヤレコノ のぞいちゃいやよ<br>お月さん | 四、 汗もふきましょ 陽もよけましようよ<br>タオル娘が呼んでいる<br>ヤンレヤレコノ ちょいとはなせぬ<br>肌ざわり |

## 3. 次号予告

2012年12月号から4回にわけて、「タオルびと」の記念すべきひとり目として尾崎今男氏をクローズアップする。尾崎氏は、戦後の今治タオルの発展を技術者、そして経営者の立場から支えてきた。「タオルびと」プロジェクトの立ち上げのきっかけとなった人物でもある。



「タオルびと」のロゴマークは、瀬戸内の穏やかな波とタオルのパイルをイメージしたものです。10のパイルは「十人十色」の意味です。